

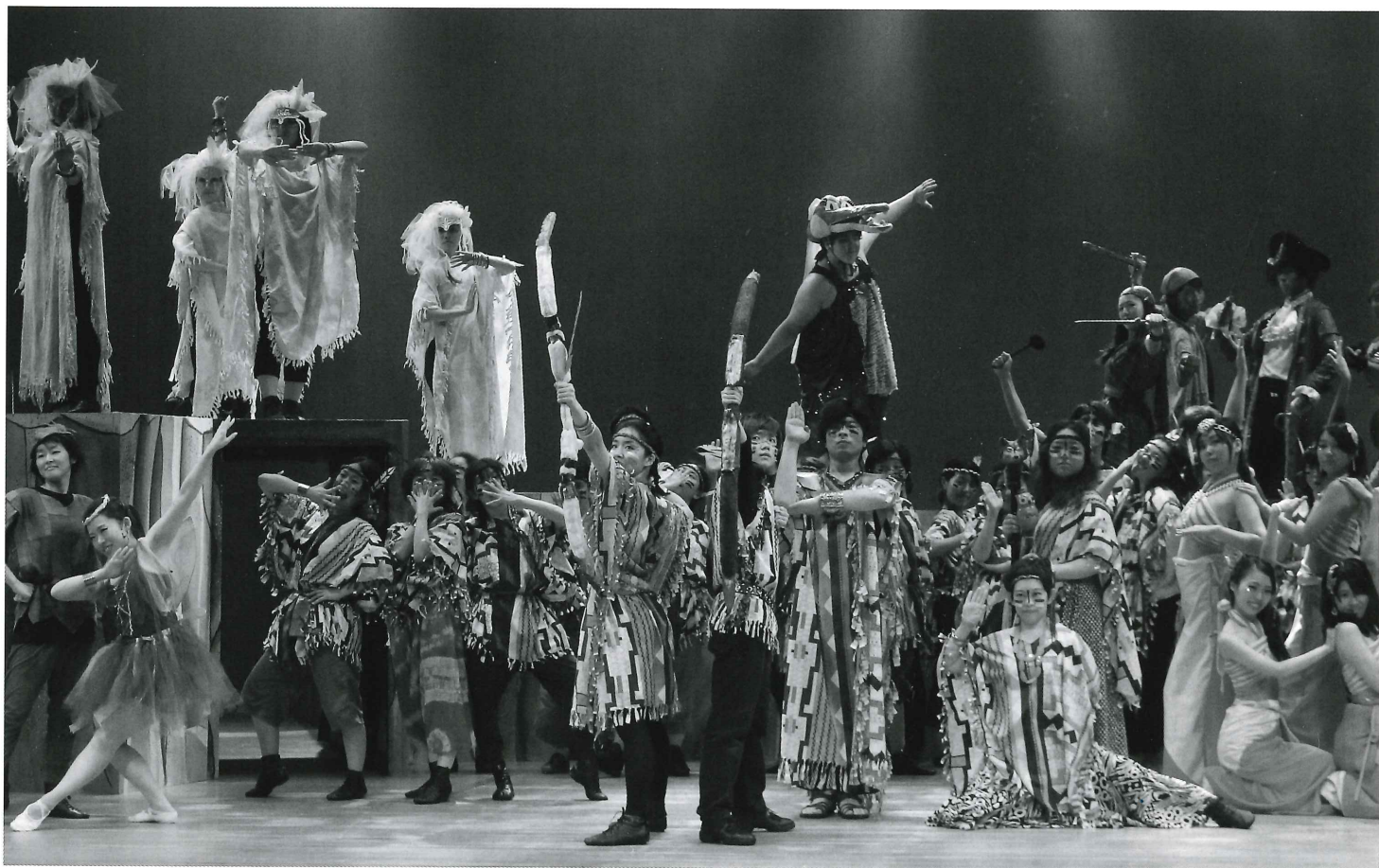
DRAMA かながわ 71

神奈川県演劇連盟事務局：神奈川県横須賀市米が浜通1-3 Tel.045-263-4472

いつでも僕らはあの頃に戻れる

「青少年のための芝居塾」公演 タイガー・リリィと不思議な羽根
2014年8月15日(金)～17日(日) 神奈川県立青少年センター ホール

文：劇団やぶさか 海老原あい



2014年度の「青少年のための芝居塾公演」が、8/15(金)～17(日)の三日間・4ステージをもって、無事、閉幕いたしました。

参加キャスト66名、動員数1493名。私達だけの力では、到底為し得る事が出来なかった大規模な公演であったことは間違いありません。各方面にてお力添えいただきました、青少年センターの皆様、芝居塾製作委員会及び神奈川県演劇連盟の皆様、出演者及びスタッフの皆様、また、お手伝いいただきました関係者の皆様に、まずは心より御礼申し上げます。

この芝居塾という企画に取り組むにあたり、まず直面したのが、当たり前ですが800席ある大きなホールでの公演、ということです。芝居そのもののスケー

ルを再検討することに始まり、それに伴う劇場側との各種打合せや資金面の問題、舞台装置（作成の是非含む）の問題、60人以上のキャストを相手にした衣装や小道具作成をどう進めていくか…等々の各種課題でした。

私達は、市民ミュージカル等、大人数が関わる芝居をメインで担当した経験がなく、ホールでの公演経験もありません。「大舞台を手伝ったことすら無い」という劇団員も多いです。

そんな未経験者ばかりの集団で、知名度も決して高いわけではない私達が、こういった規模の公演に取り組む為に、幾つか検討したことを、忘備録として記してみたいと思います。



題材選択

…客層を視野に入れ、明るいファンタジー作品を選びました。本作は、一般によく知られている名作『ピーター・パン』のスピノフ作品とし、世界観をより解りやすく提示。美術面も、明るく華やかな雰囲気を目指しました。主人公には、インディアンの娘“タイガー・リリー”を据え、塾生と同世代の子達が共感できるような、等身大の悩みをメインテーマとしました。

スタッフワークとプレ公演の実施

…今年の芝居塾の塾生募集要項に「役者だけでなく、必ず何かしらのスタッフワークに携わってもらう事」という条件を掲げさせていただきました。それを承知の上で来てくれた60名以上の塾生達全員を、当初の予定通り希望を聞いたうえで何処かしらのセクションに割り振らせてもらい、キャストと兼任で最後まで頑張ってもらおう…という手法を採りました。役者以外のセクションで舞台づくりを体験することで、参加者のモチベーションをより高めることにも繋がったと思います。

これまで塾生が担当することが難しいとされてきた照明や音響といったセクションでも、本番一か月前に、本編の冒頭（二十分）を上演する『プレ公演』を実施する事により、塾生達が「機材に実際に触れてみる」「本番のオペレーションの体験をする」ことが出来ました。プレ公演の開催にご尽力いただきました青少年センターの皆様へ、改めて感謝いたします。

一部ダブルキャスト制

…TEAM大地／TEAM太陽と、2つのグループを作り、ほぼダブルキャスト制としました。共通キャストも勿論居ましたが、メインキャスト等は、ダブルキャストとして揃え、両チームの連携をはかりました。

役者参加の塾生には、必ずどちらかのチームで名前付きの（意味のある）役に据え、塾生一人一人が高いモチベーションを維持できるよう、そして自ら積極的に集客出来るよう、配慮したつもりです。

もう一方の、メインとして出演しないチームでは、アンサンブルとして参加してもらい、目立たずとも作品全体を支えるという姿勢も学んでもらいました。

リピーター割引の設定

…ダブルキャストとしたことで、リピート来訪者の増加を狙いました。二回目以後にご観劇いただくお客様は、価格を半額まで下げ、再訪しやすくしました。

.....

「いかなる人の知識も、その人の経験を超えるものではない」という言葉があります。

これまで、お手伝いのみでしか知らなかった『青少年のための芝居塾』という企画の、その渦中へ飛び込んでみたことで、身をもってその大変さ・責任の重さを知ることが出来ました。

今回、この芝居塾を通して沢山の経験を得られたことは、今後の私達にとって、かけがえのない財産になることでしょう。そして、私達・担当劇団だけでなく、今回参加してくれた塾生達も、この公演を通じ、沢山のことを学んでくれたことでしょう。それもまた、変わらず、彼らにとって今後の糧となることと思います。

「これを機に、劇団として成長させていただければ…」という想い一つで、おそろおそろ手を挙げさせていただいた今回の企画ですが、いざ蓋を開けてみると矢張り出来ないことも多く、膝と心が折れそうになる事の連続でした。

しかしながら参加者一同の頑張りや、また周囲の皆様温かいご指導・ご協力のもと、今年度の芝居塾も、どうにか無事に幕を降ろすことが出来ました。そして閉塾式での、塾生達の笑顔や涙、寄せられた数々の温かいメッセージを見て「ああ、やっぱり、頑張ってた良かったな…」と思ったことも事実です。

この企画はあくまでも「青少年の“ための”芝居塾」です。この公演が、若い塾生達の良き思い出…そして良き経験となっていれば幸いです。そしてなにより演劇の面白さ・奥深さを感じる切欠となっていたなら、望外の喜びです。

青少年のための芝居塾公演 「タイガー・リリィと不思議な羽根」

文：高津一郎

有名なファンタジー「ピーター・パン」から発展させた新しい創作ファンタジー「タイガー・リリィと不思議な羽根」がマグカル劇場「青少年のための芝居塾」によって上演された。

物語は酋長選挙をやっていたネバーランドに突然海賊共が襲いかかり、その権力と財宝を奪い取ろうとする。タイガー・リリィと村人たちは抵抗するが破れてしまう。そこへ不思議な能力を持つ赤い羽根が現れて、村人たちに協力することを教えてくれる。タイガー・リリィをはじめ一丸となった村人たちは、海賊共を海のかなたに追いやり勝利する。村人たちはここで権力によって治めるのではなく、みんなの力を合わせて明るく楽しい生活を守っていくことが大切なのだということに目覚める。めでたし・めでたし！

となるのだが、この間実際の舞台にはタイガー・リリィ、レイヴン、ティンカー・ベル等主要な人物の他、インディアン、ロストボーイズ、人魚、ワニ、妖精、スピリットなど多彩なものたちが入れ代わり登場して、海賊と斗い、歌い、踊り、大騒ぎとなる。活気あふれる舞台だった。

ところで、このドラマを舞台で背負ったのは誰かと云うと、芝居塾からの呼びかけに応じて集まったキャストメンバーたち60名、その内50名は20代前後の女子たちだった。

だから、このドラマが青少年センターホールで上演

されたときの劇場内の雰囲気は独特なものがあった。若い塾生たちを一つの劇団の公演活動と同じように動かそうとした制作の方向性に導かれて、みんなが精いっぱいエネルギーを発揮して創りあげ、それぞれの熱いおもいを籠めたこのファンタジーを、誰よりも先ず応援してくれた同年代の多くの友や、ひとりひとりの舞台姿を観て喜んでくれる家族たちに向けて真っ直ぐに差し出されていたという印象がとても強かった。異論もあるかも知れないが、それは初めての

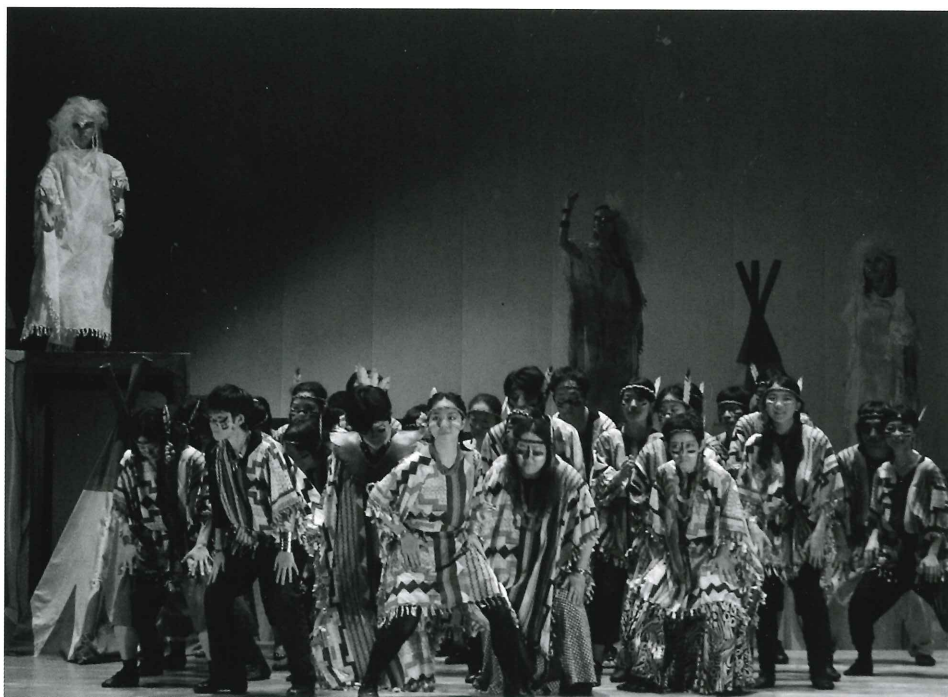
舞台経験でこの大作を創りあげる一翼を担った塾生たちの心情としては至極当然のことであったと思う。

そして、その結果としては〈ドラマの舞台は楽しさでいっぱい！〉〈参加したみんながその持てる心と力を合わせてこそ、一つの世界が舞台の上に生まれ

るのだ。〉という芝居塾のメッセージを多くの人に伝えることが出来たと思う。

最後に問題点を二つばかり。ひとつは〈発声〉のこと。今回は今時の若い人たちが使う〈ハイトーン・ハイスピード〉のせりふ廻しで押し通した感じだが、今後出来ればちゃんとした〈発声訓練〉をやってから稽古に入ってもらいたいと思う。

二つ目は、芝居の要点となる場面では、物語の軸となっているタイガー・リリィたちを歌やダンス、そして群衆の中から屹立させる手法をとってもらいたかったなと思う。



劇団紹介

神奈川県演劇連盟に新規に加盟した劇団を紹介致します。

虹の素

Essence of Rainbow



虹の素

There is nothing happier than being able to be
with somebody you cherish.

この度、神奈川県演劇連盟に加盟しました、虹の素です。主に横浜を拠点に活動しています。メンバーは20代前半を中心としたまだまだ若手の劇団です。

「明日もまたがんばろう。そう思える小さな勇気と元気」をテーマに、甘く切なく、優しく温かい、愛に満ちた作品作りをしています。ときめいて、笑って、ほんのり泣いて、観終わった後、なんだか心があったかく、優しい気持ちが溢れてくる。ぜひ、虹の素の世界を感じてみてください！！

次回公演「Arbres d' Hiver」
12/26～28 ラゾーナ川崎プラザソル

例えば、憂鬱な雨のあと。
ふと見上げたら、雲の切れ間に、虹が架かっていた。

そんな偶然のような軌跡に出会えた時、
なんだかとてもうれしい気分になる。

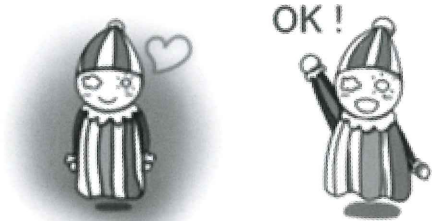
自然に笑顔がこぼれる。

不思議と次の一步が大きい。

そんなささやかな幸せでいい。

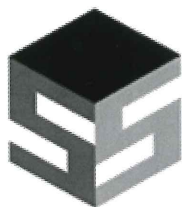
見つけた人の心に、一瞬でも輝けたら。

私たちは、そんな小さな、虹の素になりたい。



虹の素のキャラクター サニーちゃん♪
LINEスタンプ 好評発売中！

studiosalt



studiosalt

2003年に横浜を拠点として活動を開始しました。旗揚げ作品からのすべての本公演作品を、座付き作家である椎名泉水が書き下ろしをしています。2011年までは年2回の劇場公演を行っていましたが、近年では劇場という枠を飛び出し、横浜では未だ演劇で未使用となっている場所を探し、その場所からイメージ

を創出した作品を創ることで高い評価を得ています。一般的なギャラリー公演とは異なり、実際に住人が住むアパートの共有スペース、中華街内にあるシェアオフィスの会議室、鎌倉の古民家等を使用しての作品を創作してきました。

これまでに扱ってきたテーマは死刑制度、集団自殺、動物愛護センターや女子高生コンクリート詰め殺人事件等、非常にセンセーショナルな話題を作品の題材として扱ってきている作品もあり、故に作品を観劇した方からは社会派と評されることも多くあります。また、椎名泉水のてがける作品は社会的弱者と言われる人間に視点を当てつつも、ことさらにそれを強調し、是非を訴えるかけるのではなく、あくまでそれをパーソナルな話として観客に投げかけていることが大きな特徴です。

僕らの演劇

虹の素

「キミノテノヒラ」 作・演出：桜木想香／くまでたくま

5月21日～25日 於：相鉄本多劇場

五月二十三日、相鉄本多劇場。虹の素「キミノテノヒラ」を観劇しました。

ラゾーナ川崎プラザソルスタッフの熊手が主宰する劇団。若い連中が頑張っている。



パペットを使った前

説も、すっかり定着してきた。抽象的でもなく、それでいて写実的でもない舞台セットも、この劇団の持ち味。開演前から、このセットでどんな物語が繰り上げられるのか期待させられる。

物語は、最愛の母親が亡くなるシーンから始まる。残された父親と兄弟が、家業の花屋を切り盛りし、絆を深めていく。それに関わる人たちの恋愛模様。良質な作品でした。展開が早すぎるくらいはあるが、3ヶ所のセットをうまく繋げて、見ている者の気をそらさない演出は好感がもてた。特に「キク」役の役者の瑞々しい感性は、心に残った。

ここからは、爺様の戯言です。完成度が高いのだが、もう一つ物足りなさを感じてしまう。演者の熱意も充分伝わってくる。しかし、若い連中にありがちな、甘々の恋愛劇過ぎるんだな。恋愛劇は悪くないし、好きなのだが、社会が透けて見えてこない。60歳間近の爺には、ストーリーがよめちゃうんだなあ。

この連中には期待している。だから厳しくなってしまうのだが、演劇って押し付けがましくない、社会とか現代とかが背景にないと深みが出ないと思うのですよ。大人にも深い感動を与える作品に向かって、邁進してもらいたい。それには、もっと本を読んだり、社会に関心をもってもらいたい。

この劇団は、まだまだ可能性を感じる。次回は主宰熊手のホーム、ラゾーナ川崎プラザソルでの公演だ。

おおいなる進歩を感じさせられる舞台を期待しています。

川崎H&Bシアター 別府寛隆

横浜小劇場

「葬送歌」 作：井上ひさし 演出：おかざきたえこ

5月24日 於：岩崎ミュージアム ゲート座ホール

『横浜山手へフト祭』、山手ゲート座にて、創立者ノールトフーク・ヘフト氏を偲んで毎年開催される演劇

と音楽のお祭。全体的にアットホームで温かい雰囲気を感じられる催し物でした。演劇の風景と題して、横浜小劇場による朗読劇 井上ひさし作



「葬送歌」(十二人の手紙より)が上演されました。

劇作家志望の女子大生が作家の中野慶一郎先生へ自分の戯曲を読んで欲しいと送った手紙から始まり、戯曲の中の世界へ。舞台上は二つの椅子のみ。老母がひとり。老母の語りから、そこが田舎の駅のホームである事。息子の帰りを待っている事。息子は警察に捕まっていたが、釈放されたらしい事。話の筋がみえてくるに従い、何もない舞台が駅のホームにみえてきて、口では息子の行いに批判的な事を言いながらも、息子の帰りをいまかいまかと待ち構えている母の想いを感じ、すでにこの時点で涙が溢れていた私は、今日もハンカチを忘れた事を後悔しつつ、物語の中へ引き込まれていきました。

老母が息子を迎えるに駅に通い始めて三日目の朝、今日も息子は現れず。降りてきたのはひとりの若い娘。息子から送られてきた写真をみていた老母はその娘が、息子の恋人だと知りながら、わざと知らないふりをして。待ち焦がれた息子が近づいてきた予感に浮き浮きする老母。その後伝えられた息子の死。老母の期待と落胆が痛々しくて…

突如、ひとりの男性が憤慨した様子で現れ、早口でまくしたて、このお話が女子大生の戯曲であった事を思い出しました。中野慶一郎先生の出現により、目の前に広がっていた田舎の風景は一気にかき消され、全く異なる世界へと連れて行かれました。

舞台設定のない朗読劇は自分のイメージの中でいろいろな世界へと自由に飛んで行ける所が楽しいなと思います。横浜小劇場の朗読劇「十二人の手紙」はこれまで数回観劇しています。どの作品も心に余韻が残る何度でも観たい作品です。

劇団かに座 白幡志穂

風雲かぼちゃの馬車

「SELVA!」 作：重信臣聡 演出：土井宏晃

6月5日～7日 於：小劇場 B1

風雲かぼちゃの馬車といえば「歌って踊って人を斬る」をコンセプトに、観客を魅了し続ける劇団である。その表現能力は演劇人の端くれとして毎回うらやましく思いつつ、何度となく足を運んでしまう…私にとって「かぼちゃ」はそんな劇団だ。

今回の芝居は何やら虫の棲む世界を描く、とのこと。いつもと違った舞台が観られそうだと期待をしつつ劇場に

入ると…まるでジャングルの中にいるような霧…そして蒸し暑さ…何気ない雰囲気づくりが、観客の期待感をそそる。これは手を抜くところでも手を抜かない、彼らのクオリティの高さを物語っていた。



物語は、人間の知らない虫だけの王国を舞台に、体が弱く飛ぶことのできない体をもって生まれた王子を描くストーリー。他の虫とは違うという劣等感を抱きつつも、王族としての立場・責任への重圧に耐える日々を送る中、偶然にも敵国の姫と出会い、物語は進展する。

物語としてはわかりやすく万人の共感を得られるストーリーであった。その中で2点ほど印象に残った。1点目は「〇っかり八兵衛」的存在である蜘蛛の存在感。蜘蛛といえば人間にとっては嫌われることの多い生き物である。それをどこか頼りなくそして愛嬌のあるキャラクターに創り上げており、それを演じた役者の創り出す空気が物語に良い影響を与えていた。(お約束の「主人公をかばって息絶える→でも死んでませんでした～には、観客の涙と笑いを誘っていた)

そして2点目は当劇団の売りである歌と踊りだ。今回は小劇場という空間も功を奏し、特に歌の迫力があつた。群衆の奏でる力強いハーモニーはもちろん、私のお気に入りである国王役の役者のソロが心に響いた。距離が近いので余計に響いた。彼の歌の存在感や迫力が、この芝居全体を牽引していたのは明白であった。

最後に、今回一番伝えたかったのはこの劇団の基礎的な表現力の高さである。そこにいる誰もが見劣りせず輝いており、出演者全体のアンサンブルとして成り立っている。皆が笑い涙するキャラクターを演じる力や歌で観客を魅了することは、一部のそれを得意とする人間にはできたとしても、出演者全員で相応のクオリティを発揮できている彼らは素晴らしいと思った。8月にはなんとニューヨーク公演が控えているとのこと。彼らの得意とする部分を存分に発揮し、良い舞台を創り上げてほしい。

劇団河童座 椎谷大輔

劇団かに座

「夏きたりなば」 作:ふたくちつよし 演出:田辺晴道
6月13日～15日 於:かなつくホール

のんびりやの夫、正夫。せっかちだが明るい妻、紀子。自由奔放でボランティアにいそむ娘、早苗。ある日、歳の離れた独身の妹の博美から「私の大事な人」を連れて行くと連絡を受けた紀子は、夫、娘とともに来訪を待っていました。紀子が中心となり、家族は、来客の準備に後片付けや掃除に余念がない。「大事な人」とはもちろんボーイフレンドか恋人だと思い込んで、期待に膨らむ家族。

ところが、あらわれるのは歩行もままならぬ年若い男だという。妹によると“在宅ケア”で世話している老人だが、一人暮らしで、もうすぐ外出不能になるから、短い時間でも家族の味をあげあわせてあげたい、ぜひ了解してほしいのだ、と。それを実現するため、全員がニックネームで呼び合う“家族ごっこ”を準備するなど様々な伏線をおきながら、いつ彼が、数十年前に妻子を捨てた父と気づくか、どう対応するのかのプロセスが微妙に面白い。紀子は、父親である男に許せない、憎いと言いつつ、激しい言葉の裏側に血脈の愛情をにじませる。

舞台は演技も装置もさわやかで、家族の日常もていねいにうまく描かれていて、ところどころに笑いを誘うセリフ、馬場さんのコミカルな演技、最後はホロっと。面白い芝居でした。ひとつ気になったのは、転換の音楽が一曲で終わらず、中途半端なことだったことでしょうか。

劇団「横綱チュチュ」 安次嶺里絵子



劇団よこはま壺座

「シャッター通り商店街」 作:高橋正國 演出:濱田重行
7月11日～13日 於:ラゾーナ川崎プラザソル

今年の4月から(かな?)県演連に加盟しました、虹の素の主宰の熊手です。

今から10年以上前、私の初舞台の演出をされていた濱田さんの劇団、よこはま壺座さんの劇評を担当することになるとは…。恐縮極まりないと同時に、とても光栄に思います。

さて、よこはま壺座さん。2014年に入り、新人座員が7人も増えたそうで。なんともうらやましい限りです。虹の素は現在私含め6人なので、それより多い人数が新人として加入するだなんて。そんな新人たちと、古株メンバーとでつくられる今回の「シャッター通り商店街」という作品。古く廃れていく商店街。その近郊にできた大型のショッピング施設。まさしく、新と旧とがテーマのひとつに掲げられた作品でした。

新しいものが古き良きものを淘汰していく時代。一方で、それはいつまでも時代を明け渡さず、頑固に椅子に座り続けるようにも見えます。春が夏になり、秋から冬へとかわる。しかし季節は変化することに抗わない。潔く次にその居場所を譲っていなくなっていく。けれど人と



いうものはそううまくはいかない。長い歴史をたどってみても、時代の変わり目というのは変えようとする者とそれに抗う者とのせめぎ合いなのですよ。

花が咲き、葉が茂り、紅に染まり、やがて落ちる。時が移ろって景色は変われど、木の幹がそこにあることは変わらない。木の幹というのはバトンなのだ。時は過ぎる。移ろう。その中でバトンを引き継ぐのか、受け渡すのか。そしてそのリレーの中で何を残していくのか、変わらずにあり続けなくてはいけないバトンはなんなのか。それは、陳腐に聞こえるかもしれないが、やっぱり愛でしかないのだと思いました。商店街のあかねさんとみどりさんが、身を粉にして商店街の存続をめざしあれやこれやと奔走する姿、そして積み重ねてきたものを、たった一組の恋人達の為に何の躊躇いもなく捨ててしまおうとする潔さ。その姿に本当に心打たれました。ああ、私たちは心で生きているんだなあ。私利私欲にまみれて忘れてしまうことが多いけれど。私達は、誰かに思われた、大切にされた経験を通して、また違う誰かのことを思い大切に出来るのだなあ。あかねさんとみどりさんの心、そこから生まれてくる行動のひとつひとつすべてが、商店街のため、商店街に生きる人たちのため、すべてを大切に思い優しく包み込む大きな愛なのだなあ、強く感じました。そして、そんな愛のある場所に自分も生きていたいと思いましたし、そんな場所をなくしてはいけないと思いました。

また、前に書きました通り、今回は新人達もたくさん出演していた公演でした。しかし皆、新人らしさを感じさせない熱量のある演技、勢い、必死さがありありと伝わってきて、それこそ目の前で生で見るよさだなと思うとともに、新人座員がこれだけ懸命に自分の役割にぶつかっているのも、先輩である古株のメンバーがしっかりと引っぱり、支えているからなのだとも感じました。物語の中での、新と旧がどう合わさっていくかの一つの理想型を、それを演じる新旧の役者達のチームワークでみせてもらったのかと感じています。

虹の素 熊手竜久馬

劇団河童座

「フランダースの犬」原作：ウィーダ 脚色・演出：横田和弘
7月19日～21日 於：相鉄本多劇場

これが最後の相鉄本多劇場での「ファミリーシアター」です。』とあって、見逃してはいけないと思いついた劇場へ。

私事であるが、息子が小学校低学年の頃、この「フランダースの犬」の絵本を大きな声でおいおい泣きながら音読していたことを思い出す。多くの人が知っている、多くの人が涙するこの「名作」をどう料理してくれるのか大変楽しみだった。

開場して暫くすると、開演前の「楽しいお遊び」が始まった。舞台のセットでもある三角や四角をかたどった「積み木」で、会場の子供たちと「森」をつくったりするのだ。白で統一された積み木は、何にでもなれる。



残念なのは、積み木が大きいので、子ども自身で持ち上げることが出来ないこと。それでも、何を創ろうかという声かけに、考えている子供たちの姿は微笑ましい。犬の耳や鼻をつけた犬のパトラッシュ役は、人間の言葉をしゃべり、物語をナビゲートする。

アントワープの小さな村でまじめに働くが貧しいダース爺さんとネロ。そして貧しい彼らの家族の一員になった犬のパトラッシュ。この当時、馬が買えない貧しいものが犬に荷を引かせていたと聞いたことがある。然しながら生きていかなければならない人間と犬の絆があったにちがいない。ネロの唯一の親友は、ネロたちを家柄が低いからと良く思っていない風車小屋のコゼツの娘アロアだ。ネロとアロアの家族、村の人々は物語に沿ってわかりやすく登場する。そして、アロアの飼っている犬のラブが、「悲しい物語を忘れさせてくれるほど、ひょうきん且つ愛らしい。パトラッシュもラブも犬だが、物凄く人間らしい感情と性格を持ち、人間の言葉で喋り表現していることが、河童座の「フランダースの犬」の特徴の一つであろう。只、パトラッシュ役の方は緊張しているのか、ナビゲートしていく、また観客を巻き込むようなセリフが少し弱かったと思われる。セリフと身体の動きが連動していないというか、身体が不自由に感じた。(初日だったからか…)。衣装はその時代らしいシンプルなものでも好感が持てた。舞台のセットは大きいものはないが、家の門になったり、町の建物になったりと、白い積み木が自由に形を創るのは、観客がその風景を想像でき好ましい。そしてシンプルなおセットの中で、ラスト、センター正面にルーベンスの絵が大きく現れたときは見事だ。この絵を一目見たかったネロとパトラッシュが昇天するときに、彼らを囲む人々の中で、犬のラブが人間の言葉ではなく「犬」の鳴き声で鳴く。再び、息子が大きな声でおいおい泣きながらも最後まで声を出して読み上げた時の事を思い出しながら、この物語に多くの人が感動するのは何故か、涙するのは何故か、ネロは不幸に死したのか、幸せに死したのかと、想いがめぐる中、ルーベンスの絵の前のネロ、パトラッシュ、彼らを囲む人々の光の中で、ラブのこの一声（一吠え）が、胸に大変響き、印象的だった。

相鉄本多劇場でのファミリーシアターは出来なくなるが、今後も「名作」と言われるものに取り組んで欲しい。

まりこ☆みゆーじあむ 川井真理子

編集後記

青少年の為の芝居塾も青少年センターのホールで行われるようになって三回目でしょうか。とても大きな神奈川県演劇連盟の事業となって来ました。毎回、楽しそうに芝居を行う塾生達がとてもいい表情を見せてくれます。塾生から言葉をいただきました。

.....

～塾生からの言葉～

【野中春菜…TEAM 太陽／タイガー・リリィ役】

今回が芝居塾二度目の参加となります。塾生の野中と申します。

この様な大きな公演で主役という大役を任せて頂いた事は、本当に貴重な経験となりました。70人近いキャスト、素晴らしいスタッフさん、お手伝いに来て下さった皆様、他、本当に沢山の方々に支えられて私達は無事に走り抜く事が出来ました。舞台は総合芸術。私はこの公演に関わって下さった方全てを含めて「劇団芝居塾2014」であったと思っています。有難う御座いました。

【池田彩佳(日本芸術大学)…TEAM 太陽／レイヴン役】

「目以上に手は動かない。良いものを見ないと良い作品は創れない。」芸大で耳にした言葉です。

芝居塾の一番の魅力は、自分が知り得なかったことがどんどん目に飛び込んで来ることだと思いました。70人以上の人生の一部分をこの目で見て、確かめ、学ぶ。役を通して、今の自分を、仲間を見つ

める。この芝居塾での三ヶ月、見てきた全てを、私はきっと忘れないでしょう。これから先も良い作品を創り続ける為に。

【大島寛史(チリアクターズ)…TEAM 大地／フック船長役】

これはイケナイ企画だと思う。確実に参加者を虜にしてしまう。セリフを言う楽しさ、身体を動かす心地よさ、殺陣やダンスの爽快さ、稽古の厳しさ、コミュニケーションの難しさ、自分の至らなさ。お客さんの拍手と笑顔で吹き飛ばされる。けれど少し残る悔い……。

これはイケナイ。全部、もっと欲しくなる。もう一度、舞台に立ちたくなる。観る楽しさも一緒に育めたらもっと良い。演劇活動を広めてしまうイケナイ企画。末永く。

.....

今後もドラマ神奈川は、芝居塾の事をもっともっと取材していきたいと思います。

次号は例年ですと神奈川県演劇連盟合同公演を特集記事として取り上げるのですが、今年度の合同公演は2015年2月を予定しています。次号で合同公演の詳細について皆様にお伝えしたいと思います。

年明けから神奈川県演劇連盟合同公演と演劇博覧会と大きな企画が行われます。とても取材を楽しみにしております。

神奈川県立青少年センター・演劇資料室を御利用下さい

演劇資料室では、外国や日本の戯曲をはじめ演劇雑誌等多くの演劇図書を取り揃えており、戯曲などの無料貸出もしています。御利用は一回3冊まで2週間借りられます。また神奈川県内のアマチュア劇団の活動記録等もございますので大いに御活用下さい。演劇資料室で活動して頂くボランティアスタッフを募集しております。(週一回、任意の時間帯に参加いただけます。)

神奈川県立青少年センター 2階 演劇資料室 〒220-0044 横浜市西区紅葉ヶ丘9-1 ☎045-263-4472

神奈川県演劇連盟加盟団体(50音順)

- H&Bシアター ●演劇プロデュース『螺旋階段』 ●京浜協同劇団 ●劇団蒼い群 ●劇団河童座 ●劇団かに座
- 劇団川崎演劇塾 ●劇団こゆるぎ座 ●劇団スタジオソルト ●劇団やぶさか ●劇団「横綱チュチュ」 ●劇団よこはま壱座 ●虹の素
- 風雲かぼちゃの馬車 ●まりこ☆みゅーじあむ ●ミュージカルプロジェクト ●ヨコスカ・ペアフットシアター ●横浜小劇場

神奈川県演劇連盟HP: <http://kenenren.org/>